

## 『相手の意図や感情を理解し、適切な行動をとることができるようにするための指導』

### 1 研究テーマ設定の背景

対象となる児童は、6年生のA男である。1年生入学時から特別支援学級(知的)に在籍している。

小3まで1名だったが、小4からB男が入学、さらに昨年度、今年度と新入生が入ってきたので、現在、4名の在籍である。1名の在籍期間が長かったこともあり、自分が一番上のリーダーという意識を強くもっている。

そのため、命令口調だったり、自分はできていないことでも注意したりするので、下級生が素直に聞くことは少なく、それで更にA男が苛立ち、暴言を吐くことが多かった。

特に、B男に対しての言動がきつく、A男からの一方的な言いがかりでトラブルになることが多かった。

自分のことだけでなく、相手のことも考えた行動がとれるようになって欲しいと思い、この研究テーマを設定した。

#### 対象児童の実態

- ひらがなカタカナはほぼ読め、カタカナは8割ほど書ける。
- 1、2年生の漢字は8割程度読める。
- 日常的な会話を行ったり、理解したりすることがほぼできる。
- 日記など気持ちを聞き取りながら書くと、感性豊かな一面がある。
- 口調がきつい。
- 自己中心的な言動が多い。
- 劣等感が強く、自己肯定感もかなり低い。
- 相手の意図とは違うことを受け取って、トラブルになることが多い。
- トラブルになる相手は、決まっている。(B男 下学年の数名)
- 月曜日は落ち着いていて優しい言動が多いが、金曜日になるにつれてイライラしやすくなる。
- 兄弟喧嘩など家庭でのことを引きずって来ると朝から機嫌が悪い。
- 雨の日は頭が痛い、気分が悪いと言って、やる気がでないことが多い。
- 感情が高ぶると、衝動的な行動をとることがある。
- 幼少期の母子分離がうまくいっておらず、愛情不足を感じている。
- 特別支援学級では指しゃぶりは減少したが、交流学級になると指しゃぶりが見られる。

### 2 研究内容

- ① 望ましい行動の場面があれば即時具体的に褒め、シールを貼るなどで、目に見えるように残す。
- ② 適切な言動を経験させる。
  - ・SSTを取り入れる。
  - ・トラブルの際には、『教師が言語化』したり、『ロールプレイング』などをしたりして他者との気持ちの折り合いをつける経験を積ませる。

- ・朝活動の時間(25分間 1年生から6年生までの4名による合同授業)を帯時間で設定し、『ゲーム』を通して『順番を守る』『勝ち負けに対する気持ちの調整と気持ちの切り替え方』を学習する。
  - ・『3ヒントなぞなぞ』をしたり、作ったりして、端的に的確に伝える『言葉の選び方』を練習する。
- ③ 自己肯定感を高める。
- ・自分の感情をコントロールできた時や思いやりのある行動が見られた時は、『連絡帳で伝える』など担任以外の人に褒められる機会を設ける。
  - ・学習でもできたと思えるような場面を設ける。

### 3 実践の経過

#### 【研究①】

一学期は、自己の感情をコントロールできた(「やさしくできた」「我慢できた」「協力できた」)時にシールを貼るようにし、5個たまと『お楽しみ』をできるようにした。「今日、シール貼れるかなあ?」「5個になったら〇〇をしたいな」などと言ってくることもあり、意欲付けになった。

また、シールを貼ることで、担任自身もA男の行動を意識して観察できるようになり、褒めるタイミングを逃さず褒められるようになった。

その結果、自己の感情をコントロールしようという様子も見られるようになり、『お楽しみ』を3回することができた。

『お楽しみ』の内容については、「みんなでキャッチボールをしたい」「みんなでドッジボールをしたい」「みんなでロイロをしたい」というA男からの希望で行った。

このことから、個人でしたいことではなく、『友だちとの関わり』を求めていることが感じられた。

だんだんとシールへの意識も薄れ、二学期は出番がなかった。シールをもらわなくても、毎週水曜の探検や行事でA男が楽しいと思える活動があったからだと考えられる。

引き続き褒めるタイミングについても適切なタイミングを逃さないように心がけた。活動の前には、A男に対して、「優しい言葉かけで、みんなが楽しくできるようにしよう」と声をかけてから始めるようにした。

また、活動後には、どうだったかをA男と振り返るようにした。A男は「ぼくなりには優しくできた」と言うことが多かったので、担任からは、よかった点や改善点などを伝えるようにした。

トラブルがあったときやイライラしている時にハートの絵の中に感情を書き出すことも続けた。(資料1)

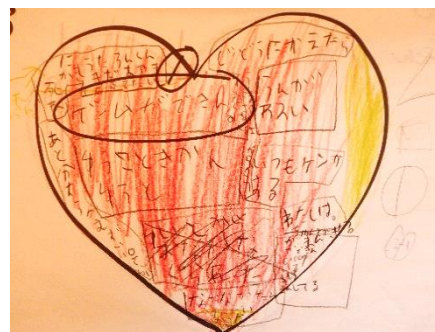
話しながら書き込んでいるうちにだんだんと落ち着いてくることがほとんどだった。

#### 【研究②】

##### (1) SSTを行った際の様子や反応

気持ちのコントロール(合同出版・明翫光宜/飯田愛/小倉正義)の本を参考に、ワークシートを使って学習した。

「自分の気持ちを知ろう」では、自分の中にはどんな気持ちがあるのか、よい気持ちや悪い気持ちも言葉で表すことができるようになる



資料 1

いうことを考えた。

「イライラ」や「うれしい」などについて、よい気持ちなのか嫌な気持ちなのかを分けていくと、「心配」「あせる」「がっかり」「はずかしい」「緊張」「困る」気持ちはわからないと答えた。

感情の表現も極端で、瞬時に怒ったり泣き出したりするのは、いろいろな感情が言葉と実感が結びついていないのかもしれないと感じた。

そこで、特に「わからない」と答えた感情については、意識して言語化するようにした。

また、どんなときによい気持ちになるかを聞くと、「みんなと遊んだ時」など『みんな』というワードが多く出てきたので、友だちと関わりたい気持ちは強いことを感じた。

## (2) トラブルの様子と対応

一学期は、決まって『ルールのある遊びの時間(火・木)』に A 男と B 男のトラブルが起きた。

A 男からの一方的なものがほとんどで、ほぼ八つ当たりとしか思えないことばかりだった。わざとではなく順番を間違った B 男に間髪いれず怒鳴ったり、1年生が失敗した時に、B 男が「もう1回したら?」と言ったのが、「自分は同意していないのに勝手に決めた」と大泣きしたりと、他の子が同じことをしても怒らないのに、B 男がすると怒ることが多かった。

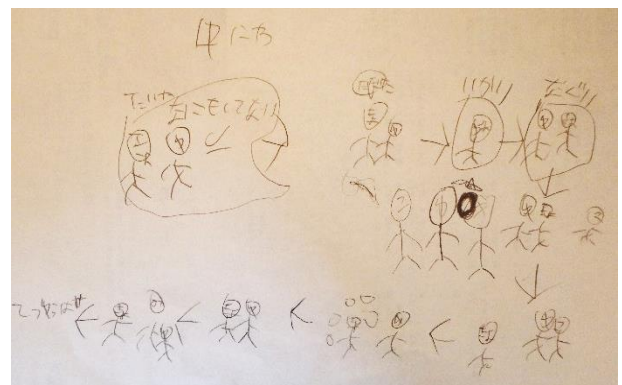
その都度、二人でお互いの気持ちを伝え合い話し合ったが、ルールや関わりを考えさせるというよりは、A 男の感情のコントロール法を中心にトレーニングしていくことが重要だと感じた。

また、朝から機嫌が悪い時は様子でわかるので、その際には他の子との関わりのある活動をやめ、個人でできるものに変更するようにした。

A 男と B 男が同じグループにならないようにしたり、二人で活動しないといけない時には、教師が間に入ったりするようにすると、週2回毎回トラブルになっていたのが、2週間に1回程度になり、朝の時間でのトラブルは減った。

10月末のトラブル(資料1)で、自分の悪かったところも納得し、その後 B 男にも謝ることができた。いつもほぼこんな一方的な八つ当たりなのだが、初めて自分でそのことを自覚することができた。

コミック会話も取り入れた。(資料2)  
トラブルの流れを確認しながら、イラストが得意な B 男が絵を描くと、感情的になっている A 男もイラストに向かって話しだし落ち着いていく様子が見られた。



資料 2

## 【研究③】

### (1) 保護者・関係機関との情報交換

保護者には、毎日、連絡帳などで様子を伝えた。

A 男が「友だちから〇〇と言われた」という内容で、朝、母親に連れられて学校に来ることが4回あった。4回とも母親が同席している間は、詳しい内容は話さず、膝に座ったり、母親の周りをぐるぐる回ったりして、甘えている様子だった。友だちから何かされたと言え、母親の気を引けると思っている様だった。そして、ある程度甘えると「ママ帰って。先生に話したいことがある。」と言い、母親を

帰して、担任と二人で話をすると、すぐに詳しい内容を話し、「時間をとってごめんな。」と担任に対して気遣う言葉を言えるようになった。

また、担任に話すことで落ち着きを取り戻し、トラブルがあった相手に対しても、「自分も悪いから相手に言わなくていい」という言葉が見られた。

その様子について、母親に伝えた。後日、母親からは、「先生には話せるんですね。相談できる相手がいってうれしく思います。これからも話を聞いてやってください。」と連絡を受けた。

母親とは、放課後デイサービスの行事や学校に来た時には、必ず話しをしていくうちに家での様子や悩みを話してくれるようになった。

母親も A 男が自分にだけ暴言を吐いて言うことを聞かないこと、父親が A 男の特性のことを理解して接してくれないことなどで悩んでいるようだった。「相談したいことがある」と担任に電話をかけてきて、話してくれるようになったのは、一歩前進したように思った。

関係機関とも保護者を交えた情報交換を3回、関係機関のみを5回行い、A 男の様子や支援の方法を共有できた。

## (2) 学習での取り組み

買いものの学習では、自分の経験からお客さんや店員さんの台詞を考えることができ、他の二人に教えてあげることができた。

カレンダーを作る学習では、細かい作業が苦手な A 男だが、作成手順を示し、休憩を入れたことにより、最後まで丁寧に仕上げることができた。本人も満足感がもてた出来上がりになった。全校に見える場所に掲示し、いろいろな人から褒めてもらえることができた。

通常の授業でも、書くことに苦手意識を持っている A 男だったが、『タブレットの活用』で、文字入力による『書く』『調べる』ことに意欲を見せ、自分の思っていることを書いたり、調べたことをまとめたりすることができるようになってきている。

社会科で都道府県を調べ、クイズを作り、特別学級の下級生や参観日に交流学級で発表することができるなど、自信をもつことにつながった。

## 4 結果の分析

【研究①】【研究②】について、みんなで遊びたいという気持ちが強いが、自分の感情のコントロールがうまくいかず、本人の理想通りに遊べない様子がわかった。

そこで用いた方法として、『ハートに気持ちを書き込む』『SSTでの気持ちの捉え方を経験する』などの学習を行うことで、自分の感情が今どんな状況にあるのかを理解させることができた。

トラブルが起きた際に、A 男の気持ちを理解し、納得するまで話したこともよかった。

しかし、相手のことばかり責めることが多く、納得するまでにはかなりの時間がかかった。トラブルの度に、毎回、時間をかけて話しをすることはできなかった。

【研究③】について、関係機関と情報を共有し、保護者と連絡を密にとったことにより、A 男の周りの大人が同じ方針で関わるることができた。

また、保護者を含めて関係機関との話し合いをもてたことにより、学校や家での様子だけでなく、その他の場所での A 男の B 男に対する関わりが話題になり、保護者も A 男の言動について考える機会になった。保護者から相談したいことがあると連絡をしてもらえることも増え、A 男との関わりで悩んでいることや家族間で方針が合わないことなどを話してくれるよ

うになった。A 男のことで話したいことがあるときには、すぐに学校に来てくれるようになり、連携とまではいかないが話はしやすい環境が整ってきた。

## 5 成果と今後の課題

A 男が友だちと遊びたいと思っている気持ちを大切にしたいと思った。

そのためにも、『自分がどんな時に気分が良くて、どんな時に機嫌が悪いのか』を A 男に理解させる必要があると感じた。指導を継続的に行うためには個別の時間が必要となるため、『時間の確保』も課題である。

また、自分の言動を振り返ることができずに、相手のことばかり責めることが多いので、『落ち着いてから話すこと』『コミック会話などで自分の言動を客観的に見えるようにすること』が引き続き必要であると思った。

A 男は4月から中学校へ進学する。

そのため、A 男が安心して通えるよう『中学校との引き継ぎ』を密にし、連携を図っていきたい。

二学期の終業式の後、母親、兄、A 男、特別支援学級担任、交流学級担任で冬休みの過ごし方について確認をし、1日の簡単な時間割を作った。今まで、休みの日は1日中ゲームをして母親の言うことを聞かず、ギリギリになって宿題を始めて終わらないという状況だったので、今回の話し合いの結果、冬休みの過ごし方がどうだったのかの振り返りをするにより、3学期からの生活に生かせるようにしていきたい。『保護者や関係機関との情報共有』は、今後も続けていく必要がある。

複数で対応することで共通の理解が図れたので、今後も母親と担任だけでなく、父親や兄にも参加していただくよう声をかけていきたい。

また、母親が子育てにとっても悩んでいる様子なので、SC、SSW と話す機会も検討しているところである。